

◆2021年4月第1週の説教

■日時：2021年4月4日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「あの方は復活なさって、ここにはおられない。」

■聖書：新約マルコによる福音書 16：1-8（新約 p97）

■讃美歌：325「キリスト・イエスは」・226「輝く日を仰ぐとき」

お早うございます。

皆様、お元気でしたか？

従来のコロナウイルスに加え、変異したウイルスによる感染も拡大し、緊急事態宣言が解除されたのも束の間、第4の波が襲い始めています。

私たちの教会も、今日から通常の礼拝を再開する予定でしたが、来週から再びオンラインによる礼拝に戻ります。

しかし、いよいよ待っていたワクチン接種が始まります。何とか5月2日（日）からは、今度こそ本格的に礼拝及び聖書研究・祈祷会を再開したいと願っています。

皆様への手紙にも書きましたが、公共の交通手段を使って礼拝に来られている方は、感染拡大が収まるか、ワクチン接種を受けるまで、ご自宅で礼拝を守っていただければと思います。もう少しの我慢です。宜しくお願い致します。

さて、今日はイースター、イエス様の甦りの朝を迎えました。

早速、マルコが書いている甦りの朝の出来事を見て行きたいと思います。

1節です。

1：安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。

金曜日の夕方、アリマタヤのヨセフによって十字架から降ろされたイエス様は、間もなく安息日が始まるという時間のないまま、身体だけ亜麻布で覆われ、塗るべき油も塗られる

ことなく葬られていました。処刑された四人の遺体は、安息日が始まる前に葬りを終えなければならぬと定められていたからです。

遺体を納めた場所を知っていたのは、マグダラのマリアなど女性たちでした。

イエス様が十字架に架けられる前まで、3年もの歳月、寝食を共にした弟子たちはどこに消え失せてしまったのか、誰一人として女たちと行動を共にする者はいませんでした。

重罪人として処刑された者に関わる危険は、誰であろうと同じです。遺体の引き取りをピラトに願い出たアリマタヤのヨセフに対し、マルコは「勇気をもって」願い出たと記しています。このように、犯罪人に関わる危険を顧みず油を塗りに訪れた彼女たちをそうさせたもの、それは一体何であるのかと思うのです。

復活の場面は、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネでそれぞれ違っています。

しかし、それにもかかわらず、全ての福音書の著者が共通に記しているのは、墓を訪れたのが女性たちであること、そして、女性たちの中心にマグダラのマリアがいたことです。

ガリラヤ湖の西にあったマグダラ出身のマリア。彼女は、イエス様によって7つの悪霊を追い出していただき、癒された女性でした。彼女の救われる前までの苦しみと生きていることへの絶望の闇が深ければ深かったほど、イエス様への感謝の思いは誰よりも強く、関わることへの恐れを乗り越えさせたのです。

マリアと行動を共にしたヤコブの母マリアとサロメも又、イエス様への同じ感謝の思いがあったのだと思います。ですから、2節、

2：そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。

週の初めの日、日が出るとすぐ、即ち安息日が終わり、夜が明けるのを待ちかねて、女たちは墓に向かいました。

3節です。

3：彼女たちは、「だれがああ墓の入り口から石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。

イエス様が葬られる場面を最後まで見届けていた女たちは、墓の入り口には非常に大きな石が転がされ、墓の入り口を塞いでいたのを知っていました。ですから、墓に入るのに、誰がその石をどけてくれるのかと不安に感じながら、葬りの場所に着いたのです。

4 節。

4：ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。

驚くことがすでに起こっていました。

彼女たちにはとてもどけることが出来ない墓を塞いでいた石が、既にわきへ転がしてあったのです。不思議な思いに打たれながらも中に入ります。

5 節です。

5：墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。

石がわきへ転がしてある。何が起きたのだろうかと言（いぶか）しく思いながら中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見え、強い驚きに打たれたのです。

白いと言うのは輝くと言う意味があります。又、右手に座ると言うのは、神様の力強い業、救いが訪れる方向を意味しています。つまり、輝く衣を着た若者が、神様の力強い業、救いの訪れを象徴するかのよう、遺体が置いてあった場所の右手に座っていたと言うのです。

そして、若者は、強い驚きに打たれている女性たちに語りかけました。

6 節です。

6：若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めし

た場所である。

ナザレのイエス。マルコがイエス様のことを語るのに「ナザレのイエス」と呼んだのはここだけです。ガリラヤ地方の小さな村、ナザレで育ち、神の国の福音を宣べ伝えたナザレ人イエス。

マルコはなぜここでイエス様のことをあえてナザレのイエスと語ったのでしょうか？

それは、イエス様が、十字架にかけられて殺されるまでは、人の子としての歩みを全うされたからです。そして、そのイエス様を、神様が死を打ち破って復活させたその時、神様の全人類に対する救いの業は成就し、イエス様は人の子からキリスト、即ち世の罪を取り除く救い主となられたことを告げるのです。マルコは、若者によってイエス様の遺体が置かれた場所を示し、そこには何も無いことを確かめさせ、イエス様がキリスト・イエスとして蘇られた事実を彼女たちに教えました。そして命じます。

7節です。

7：さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

この若者の言葉は、慰めに満ちていました。

イエス様を捨て去って逃げた弟子たち、そして又イエス様を3度も知らないと言って裏切ったペトロの名を上げ、イエス様がガリラヤで彼らに再び会うことを伝えなさいと言うのです。

『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。』

何と言う言葉かと思えます。

弟子たちの裏切りに対し、赦しは一方向的に告げられました。

責めても、責めても、責めきれないほどの過ちをペトロや弟子たちは犯しました。

ペトロも弟子たちも、イエス様と行動を共にすると誓ったはずです。

最後まで行動を共にすると。

しかし、心は熱していても肉体は弱く、ゲッセマネの園では、イエス様が祈っている間、眠り続け、イエス様が捕らえられた時、逃げ去りました。

にもかかわらず、そのような弟子たちを一言も責めることなく、ガリラヤで再び会われると言うのです。以前、弟子たちに語られていた通りにです。

そして最後の8節です。

この若者の言葉を聞いた女性たちについて、マルコは次のように記しました。

復活の場面をこのように記して終えるのは、マルコだけです。

8：婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

唐突な終わり方です。

皆さんのお手元にあるマルコによる福音書を見ると、8節に続き、結び一として [] の中に9節から19節まで書いてあり、同じく結び二として [] の中に文章が載っています。この結び一と二は、8節で終わるのはあまりにも不自然な終わり方なので、全体のまとまりが良いように後になって加えられたものです。

しかし、大切なことは、事実として、マルコによる福音書が8節で終わっていることです。1章1節の「神の子イエス・キリストの福音の初め」で始まったこの福音書は、16章8節の「恐ろしかったからである」で終わるのです。

他の福音書記者であるマタイやルカやヨハネと違って、マルコは甦りの具体的な場面を書きませんでした。

マルコが記したのは、イエス様の葬りと言う出来事に、神様が介入されたこと、そして神様の介入に対して、人はただ恐れと慄（おのの）きを持ってしか対し得なかった事でした。

葬られたはずのイエス様がいないと言う事実。

そこには、輝く衣を着た天使が座って、イエス様が甦られたことを告げられた事実。

さらに、かねて言われていたように、弟子たちとガリラヤで再会するとの伝言。

訪れた女性たちが目にしたのは、今まさに、イエス様に対し、神様が死より甦らす力を使用した事実でした。その事実を前にして、恐ろしかったのです。震え上がり、正気を失ったのです。そして、墓から逃げ去り、誰にも何も言わなかった、いえ、言えなかったのです。

神様に会おうと言うことは、そのようなことであるとマルコは記しました。

そして先に述べたように、イエス様の復活とは、十字架による救いの業が完成することであり、まさにマルコがこの福音書の冒頭、第1章第1節に記した、神の子イエス・キリストの福音を告げ知らせることでした。

私たちが自分で負うべき罪を、私たちに代わって負って下さり、陰府に降られたイエス様。しかし、そのイエス様を陰府の淵より引き上げ、死を打ち破って甦らされた神様の勝利、それこそが神の御子、主イエス・キリストによって私たちにもたらされた福音です。

週の初めの朝早く、主イエス・キリストは神様によって死を打ち破り、甦らされ、復活されたのです。

祈りましょう。